

ババちゃんとの関わりの中で考えたこと

2003年からあうんにかかわってきた馬場信一さん（通称ババちゃん）が、8月16日亡くなりました。享年60歳でした。

特に山谷界隈の団体にとって、ババちゃんはかなりの有名人です。一般的な言い方をすれば、軽度の知的障害があり、精神障害もあり、といわれる人でしょう。いつのまにかあうんのメンバーになり、給料が、あうんが休みでない限り、誰よりもあうんに通った人でした。たババちゃんはどうした？何かあったんじゃないか？」と心配されるほど。とにかく良くも悪くもババちゃんはあうん—の個性の強いメンバーだったと言えます。そんなババちゃんの存在が、あうんにとって、どんな意味を持つのかを考えたいと思います。

斎場で、今は退職したメンバーが言った一言が忘れられません。「ババちゃんがいられるあうんがすごかったんだよな。」ここ2-3年のババちゃんは、体調を崩していたこともあり、仕事は一切していませんでした。生活保護で生活を維持していましたが、その管理、病院へのつきそい、ババちゃん的生活全般に渡って、あうんで責任を持っていたと言っても過言ではないと思います。「お腹が痛い」と大騒ぎをして、救急車を呼び入院になるけれど、ちょっと良くなると無断で出てきてしまうババちゃん。何度病院に頭を下げたことでしょう。それでもババちゃんはあうんのメンバーでした。元気に働いていた時は、もちろん同じ時給が出ていました。そんなババちゃんですが、途中から入ってきた若者もババちゃんとはごくごく普通に会話していましたし、ババちゃんがいることが当たり前なあうんだったと思います。

3年前くらいに、共同連（障害者と健常者が共同で働く場を目指した団体）の方々が見学に来たとき、「あうんの障害者率はどのくらいですか？」という質問が出ました。当時、手帳を持っている人間は誰もいない、逆に言えば、障害者福祉制度に乗れる人間は誰もいないということです。でも、ババちゃんに限らず、この人はこんなところが苦手で、そこをやらせると失敗する等、ともに働く中でそれぞれが体得していく、そんなことを答えたように思います。ババちゃんの手帳を持っていないこと、これはババちゃんの生い立ちにも関係があるでしょう。たぶん経済的にも家庭的にも恵まれていなかった彼にとって、制度につながることは難しかったと思います。では、ババちゃんにとって、障害者として制度に乗れたほうが良かったのか？そこは本当に難しい。でも、ババちゃんは確かにあうんのメンバーとして存在していました。そして、あうんのメンバーもそんなババちゃんを時には困りながら、時には怒りながら、時にはともに笑いながら受け入れていました。そこが、あうんのあうんたるころだったと思います。

ババちゃんは、ある意味あうんにとって、象徴的な存在だったと言えるでしょう。そんなババちゃんを失った今、あうんのこれから進むべき道は何なのか？1人1人に問われていると思います。

【荒川 茂子】

